

# みあかり



津市・三重縣護国神社 万灯みたま祭

## 目次

- 再認識 — ご朱印巡りを通して — P 2～3
- 教化委員会の総括 P 4
- 夏休み親子せんぐう教室 P 5
- 特殊神事 子授け餅まき神事 P 6
- 雅楽愛好会 P 7
- 樹齢700年の御神木 P 8

## 教化特集号 第21号

三重県神社庁  
庁報編集委員会

# 再認識

## —ご朱印巡りを通して—

萩 美香



「伊勢の国において事案しすな」ある日、大好きな祖父がこう教えしてくれた。昔から、伊勢の国というところは、神々に守られており、日々の生活を営んでいくうえで何も心配することはない、と。八十六歳になってもなお勉強し続ける祖父のことだから、きっと何かの本にでも書いてあったのだろう。

いや、もしかしたら祖父の戯言かもしれない。だが、私は本当にその通りだと思う。この伊勢の国には、きっと何かが宿っている。

三重県—私のふるさとである。県内には、「一生に一度はお伊勢参り」と言われるほど、古来人々の信仰を集めてきた伊勢神宮が御鎮座されている。「日本人のこころのふるさと」と言われている伊勢神宮。だが、大学までの二十二年間を三重県で過ごしてきた私にとって、そこはいつでも行くことができる場所であった。特にこれといった感情もなく、抱いていたイメージは、境内がとても広く、参拝するのが大変だということ。

近くの神社ならすぐ参拝できるのに、何故、人々はこれほどまでに伊勢神宮に行きたがるのだろうか。恥ずかしながら、そんな疑問さえ抱いていた。

現在、私は神社仏閣巡りを趣味のひとつとしている。インドア派だった私が、最近では休みとなるといそいそと出かけていく。ある時は徒歩で、そしてまたある時は電車や飛行機で。向かう先は、決まって神社や寺院である。というのも、そこには私がある魅力の虜になってしまったものがあるからだ。ご朱印である。

ご朱印とは、神社や寺院において、主に参拝者向けに押印される

印章・印影のことである。真っ白な紙の上に、くっきりと浮かぶ朱の押印と墨書きの文字。黒・朱・白の三色で織りなされるご朱印は、それぞれ個性豊かで、まるで美術作品のようである。気を付けなければいけないのは、決してスタンブラーリーではないということ。神仏とのご縁を結ぶ、とてもありがたいものなのである。そもそも、ご朱印は、寺院で参拝者が経典を書写し、それを奉納した証としていただけのものであった。いつしか本来の意味は薄れ、時代とともに社寺参詣が一般化したこともあってか、現在では、多くのところで頂くことができるようになったとされている。

そんな歴史を聞くと少し身構えてしまうかもしれないが、参拝した証としていただける今、大切なのは、神仏への畏敬の念を忘れず、厳粛な気持ちでお参りすることだと私は考えている。現に、ご朱印集めを始めてからというもの、社

寺の歴史や建築物、ご祭神などが気になってしょうがない。時には、古事記や日本書紀を引っ張り出し、日本神話に読みふけてしまいう自分がいる。

ご朱印集めから始まった神社仏閣巡り。わずか一年で五冊目のご朱印帳が終わろうとしているほど、たくさん神社や寺院を訪れてきたが、その中でひとつ気付かされたことがあった。それは、今も昔も、人々にとって伊勢神宮は憧れの地であるということだ。というのも、県内はもちろん、県外でもたくさんの方で伊勢神宮の遙拝所を目にしてきたからだ。三重県で生まれ育った私にはあまりに身近すぎて気付くことができなかったが、何十年も何百年も前から、ここ伊勢の国はたくさんの方々にとって崇拜、憧れの対象だったという現実がそこにはあった。伊勢神宮の偉大さや尊さに気付かされたのは、この時である。

「なにごとのおはしますかは知

らねども かたじけなさに涙こぼるる」西行法師が伊勢神宮を詣でた際に詠んだとされている有名な歌である。参拝者が歩く玉砂利の音だけが響き渡り、さらに耳を澄ますと五十鈴川のせせらぎが静かに心地よいメロディを奏でる。のびのびと枝を張る木々の間からは、木漏れ日がキラキラと降り注ぐ。手つかずの自然。特に何かがあるわけではない。だが、人々はこの地を求め、そして、何かを感じ取り、日々の生活に戻っていく。今ならわかる。何故、この地がこれほどまで人々を魅了してきたのかということ。きつと、ここには何かが宿っているのである。

ご朱印帳を見返しながら、旅の思い出とともにいろんなことに思いを馳せる。昔からたくさんの方々に憧れられてきたこの伊勢の国。その現実には驚かされると同時に、三重県民であることに改めて誇りを感じている。今年、伊勢神宮は式年遷宮という二十年に一度の節

目の年を迎える。その前に気付くことができず本当によかった。私にとってのご朱印は、一言では言い尽くせない。久しぶりに嗅ぐ墨の香りは日本人でよかったときえ感じさせるし、またある時には、地元の良さや素晴らしさまで気付かせてくれる。もしかしたら、何が導いてくださったのかも知れない。

これからも、私はご朱印帳とともにさまざまなことを感じ、発見していくのだろう。それらはきっと、私の人生を豊かにしてくれるものだと信じている。



## プロフィール

萩 美香

(はぎ みか)

元ミス日本グランプリ

平成十四年「ミス津」に選ばれ、その後平成十九年には「ミス日本グランプリ」に。

現在はタレント・女優として活躍中。そのほか、「みえの国観光大使」として三重県の観光PRイベントなどに積極的に参加。その功績が認められ、平成二十三年には三重県観光協会から最年少の「観光審議委員」に任命される。

三重県津市出身

# 教化委員会の総括

三重県神社庁教化委員会は、各支部より選出された教化委員と正副庁長・理事で編成され、年二回開催している。任期を三年間とし、

委員会の全体会では、全国教化会議・教学研究大会・神社振興対策指定神社・青少年対策研修会・大麻頒布推進モデル支部・支部教化



実践の各報告、また毎年の教化目標・部会事業を各部会で検討している。

平成二十四年は、特に御遷宮前の重要な時期でもあり、青少年対策事業として「夏休み親子せんぐう教室」を企画開催し、次回の御遷宮に記憶を残してほしいと期待される青少年と、総代の年齢層となる保護者への啓蒙を行った。

部会事業の内容は、第一部会の北勢地区（県北部六支部）では、「国旗を掲げる活動、鎮守の森を生かした子供たちの活動を推進する」のテーマにより、標語「祝祭日には国旗を掲げましょう」、国歌君が代歌詞を記載した「クリアファイル」を六千枚作成。

また、平成二十年に配布した国旗掲揚啓発幟「祝祭日には国旗を



掲げましょう」の在庫が無くなった為、新たに作成することとなり、紫生地に白字抜きとした幟二千本を作成した。

第二部会の中勢・伊賀地区（県中部八支部）は、冊子「中勢伊賀地区の特殊神事」を三月末日に千五百部発行。また、神社参拝幟「氏神様にお参りしましょう」を二千本作成した。

第三部会の南勢・牟婁地区（県南部十支部）は、地区内の神社のデータを集め、ホームページアドレス（[kyoka.mie-jinjacho.or.jp](http://kyoka.mie-jinjacho.or.jp)）を開設することによって自由に閲

覧が出来るようにした。また冊子「南勢・牟婁地区の特殊神事」を千五百部発行した。

今後の教化委員会は、御遷宮完遂による参宮の促進、氏子意識の再認識と家庭祭祀の継承を図ると共に、地域の歴史・文化を大切に、鎮守の森の保護育成や青少年の教化に取り組んでいかなければならない。

いずれにしても課題は多岐にわたるので、今後、恒久的継続的に取り組んでいく必要がある。



## 夏休み親子せんぐう教室

去る平成二十四年七月二十九日（日）に「夏休み親子せんぐう教室」が開催された。

これは三重県神社庁青少年対策委員会の企画で、青少年への教化活動の一環として「子供達に式年遷宮を知ってもらいたい」「お参りする事により神宮をもっと身近に感じてもらいたい」といった目的のもと企画された。参加者は小学生（保護者同伴）か中学生とし、せんぐう館の見学↓忌火おこし体験↓外宮参拝↓神域内散策といった内容である。

子供の募集人員三十名に対し参加者は三十九名、保護者三十一名、スタッフ十二名、計八十二名の人数となった。

当日九時三十分スタッフ一同炎天下のせんぐう館前に集合、森本

巖教化部長により各種説明ののち「子供達への熱中症対策は勿論の事、スタッフの皆さんも各自気を付けて下さい」との言葉を頂く。

その後参加者達も順次集合し、十時三十分定刻通り教化部長と小堀邦夫せんぐう館館長の挨拶により開会。参加者への日程説明の後、二班に別れてせんぐう館を見学した。館内では、せんぐう館職員による式年遷宮の説明・遷宮シアターでのビデオ鑑賞・御装束神宝拝観・原寸大の御正殿の側面再現模型の見学など充実した内容であった。とりわけ子供達にはその模型が印象的であったようで、間近に見上げながら口々に「でっかいなあ！」「ピカピカしてる！」とかなり興奮したようであった。

正午頃せんぐう館を後にし、神

宮育成会館まで徒歩で移動。昼食の後、館内にて忌火おこし体験。参加者全員が交代で御火鑽具を使い、忌火おこしに取りくんだ。神宮職員がお手本を見せてくれた上、介助に付いてくれるのだが、中々上手く出来ず子供達は四苦八苦しながらも、初めての忌火おこし体験に実に楽しそうだった。

そして会館を後にし外宮へ。途中手水舎で手水の作法や、参拝の作法を説明してもらいながら外宮御正殿を参拝。子供達が神妙な面持ちでお参りしていたのが印象的であった。

その後、本来は境内散策の予定であったが、当日は猛暑日であり、子供達の体調を最優先とし、せんぐう館前まで戻り、宇治土公貞尚教化担当理事による参加者への御礼と挨拶の

後、解散した。

猛暑の中での開催であったが一人の体調不良もなく無事に終了し、スタッフ一同安堵した。

今回は、保護者の方も子供達に混じり熱心に見学・体験していただき、幅広い世代に教化活動が出来たと思う。



## 特殊神事

かむおちがやしんじや

# 神落萱神社

## 子授け餅まき神事

伊勢市倭町に鎮座する金刀比羅神社・神落萱神社（向井満美宮司）では子授けを祈願する特殊神事『子授け餅まき神事』が執り行われている。

同神社の創建は天平年間と古く、外宮の所管社であった。元来は同



地にあった常明寺（明治二年廃寺）

の境内に祀られており、時代の流れと共に朽ち果て、正保二年（一六四五）に外宮禰宜であった檜垣常晨が再興し、寺の南西に祀った。

その後、明治二年北西に遷座した。

その際に産土神として祀りたいとの町民の願いにより、外宮から許可を得て、氏神として崇め祀ることとなった。その時、町名も「常明寺門前町」より「倭町」に改められた。その後、近鉄宇治山田駅前にある箕曲中松原神社に合祀された。

昭和二十二年に元の地に祀られる事になった。同神社の御祭神は鵜萱草葺不合尊とその妃・草野姫命の二柱を総称し神落萱神と称す。

古書によると「神殿一殿にして扉は二口」とあり、二神合祀の証

とされる。この神は多産にして子が十指に余るといわれ、故に子授けの神として崇め祀り、子孫繁栄を祈ったものとされる。

子授け餅まき神事は毎年一月八日の大祭と共に行われる。前日に古老の氏子総代が精進潔斎を行った後に四千個（二俵）の男女の生殖器を模した紅白の餅を奉製し、神前に供えられる。

この餅は長さ5cm程で男性は『シン餅（白餅）』、女性は『カイ餅（紅餅）』と呼ばれる。

祭典には氏子総代や町内役員、そして懐妊を祈願する県内外の氏子崇敬者が参列し、神事が執り行われる。毎年三十組程の夫婦や代理の親族が祈願に訪れる。

午後三時からは境内に設けられた櫓から供えられた餅がまかれ、多くの参拝者が奪いあう。

このまかれた餅は焼いて食べる『やきもち』につながる為、雑煮などで煮て食べることとされている。男性は『女性を表わすカイ



餅』、女性は『男性を表わすシン餅』を食べることで願いが成就し、元氣な子供が授かるという。

実際に祈願を受けた後、健康な子供が授かり、喜びと感謝を奉告しに多くの夫婦がお参りされている。

向井宮司は「古くから伝わるこの神事をいつまでも大切に守っていきたい、町内会も地域活性化の一つとして盛り上げて下さり嬉しいです」と話している。

# 雅楽愛好会

鈴鹿市江島町の江島若宮八幡神社（前川栄次宮司）では、十年前より「雅楽祭」を開催している。今では、「雅楽」といえば江島さんと、地元に限らず広く知られるようになってきている。

境内は松が多い砂地で、江戸時代の絵図や絵馬（七十一面が三重県指定有形文化財）には、神社近くまで海が迫っていた様子が描かれている。文化三年（一八〇六）に建立された大常夜燈は、湊に入りする船にとって燈台の役目を果たすなど、海上安全の信仰を集めてきた。

江戸時代には、廻船で財を成した商人たちによって賑やかな祭礼が行われ、現在では、夏の石取祭と例祭である秋祭が年間行事の中心となっている。



これらの祭典では、氏子による伶人が雅楽の奉奏を行っているが、それとは別に「雅楽愛好会」が結成されている。

皇學館大学在学中に雅楽部に属し、龍笛を習得した前川宮司が、十数年前に立ち上げたもので、当

初は、神社に集まって練習するだけであった。しかし、演奏会を開くことで、練習の励みにしていきたいと、平成十五年から拜殿にて「雅楽祭」を始めた。

越天楽や納曾利などの演奏のほか、雅楽や神道に関するクイズを行い、神社について楽しみながら学べるよう工夫している点も、大きな特徴である。

演奏会には、宮司夫人の千代子禰宜が手作り縫い上げた直垂ひたひら（二十領分）と蘭陵王の装束を着装する。

今では、六月の恒例行事となった「雅楽祭」のほか、近郊の神社の祭典奉仕に留まらず、各地の催しにも招かれ演奏会を行っている。練習は毎週木曜日の夜に、神宮の元楽長であった東浦秀昭先生、岡崎在住の小林清己先生と前川宮司が指導にあたっている。

さらには、東浦先生によって、本居宣長の和歌に曲と振りをつけてた神楽「江島の海」がつくられた



ことで、毎年の「雅楽祭」を楽しむにしている氏子も多いという。神社の祭礼には、あまり関心を示さない人たちが、「雅楽祭」には足を運び、今では地元根付いた初夏の風物詩となっている。また、会員十八名は鈴鹿市以外の人も多いことから、演奏会には市外からの参拝者も少なくなく、神社を広く周知する機会ともなっている。



# 樹齢七百年の御神木 八幡神社のケヤキ



緑のコーナー

名張市の八幡神社（松生典子宮司）のケヤキは、県指定の天然記念物である津市美杉町の国津神社と真福寺のケヤキに次ぐ県内第三位の太さの貴重な巨木です。

推定樹齢は七百年。幹回りは5.8メートルで樹高は41メートル余り、根元は板根状に発達し、生育状態は良好です。横にはすぐ拝殿が建っていますが、根が建物に影響しない基礎造りになっています。全国の八幡社にケヤキが多いのは、古くは神木として崇められ、また江戸時代には幕府が植栽を推奨したことにも由来しているともいわれています。当社の境内には他に8本のケヤキがあり、樹齢数百年の木もあります。



観応元年（1350）に石清水八幡宮より勧請され、天正九年（1581）織田軍による侵攻（天正伊賀の乱）により、兵火に遭いました。この時の社人は本殿が焼け落ちる前に御神体を奉じて難を避け、このケヤキの下に御神体を隠し、戦火から守ったと伝えられています。そして、世の中が平静になったのを見計らい社殿を再建し、祭祀を復興するに至りました。幹には大きなこぶができており、当時御神体を隠した場所の目印にされていたともいわれています。



この地区は狐にまつわる昔話が多く残されています。境内の四隅にはケヤキが植えられているため、結界になり悪い狐が入ってこられないといわれており、狐にだまされ帰り道を見失ったときの道標にもされていました。

また、この御神木には梟・啄木鳥・鳩などが棲みつき、白蛇もいます。蛇は竜神様の化身で古くから雨乞いの神様として信仰され、水不足の際にケヤキの根元に白蛇様への供え物をする<sup>ふくろう きつつき</sup>と雨が降るといいうい伝えもあります。

（鎮座地 名張市赤目町丈六324）

## 教化にともなう原稿・ご意見を

募集しています。（下記編集委員まで）

教化部長	森本 巖	（北牟婁）
編集委員長	宇治土公貞尚	（伊勢）
委員	秦 昌弘	（四日市）
〃	平野 直裕	（桑名）
〃	新山 英洋	（員弁）
〃	宮田 幸尋	（上野）
〃	常山 和哲	（飯南）
〃	多田久美子	（津）
〃	原 忠照	（神社庁）

御社名欄にご利用下さい。

発行所 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成25年6月30日